

もしも吉良吉影がヒロ
アカ世界に生まれたら

こまんちん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

振り返ってはいけない小道は残酷な事をする。その者が抱いていた幸福に対する感
性を奪う。

そうして女性の手に対する幸福の感覚を奪われた吉良が、ヒロアカ世界に生まれてい
たら。

目 次

第一話 それ、これ、あるいは、あれ。

1

第二話 男殺しの女王

第三話 地獄に通ずる門



35 20

第一話 それ、これ、あるいは、あれ。

起床とは簡易的な誕生なのではないかと、男は最近思うようになつた。となると就寝は簡易の死だ。ならば一日という一生をどう生きたものか。それが問題だ。未だにわからない。

カーテン越しから薄らと春の陽日が透ける一室で、淡い藤色の寝間着姿の男が一人、ベッドに腰掛けている。頬は不健康によるそれではなくこけていて、端正な眉に熱の無い瞳。ウエーブのかかった頭髪を後ろに撫でつけていたが、生え際中心から左右に二房垂れている。

男はほんの少しの前傾姿勢で、膝上で何かを持つように両手を宙に添えていた。見る物が見れば、何をやつているのか理解に苦しむ。だがその男、吉良吉影の視界においては別だ。

吉良の両の手は奇妙な生物の頭部の頬に添えられていた。それは体毛の無い滑らかでのつぱりとした猫のようだ。まぶたも無く、鼻も無い。しかしあつと奇妙なのはその体躯だった。

人間のそれなのだ。不気味に過ぎるが、陶磁のように滑らかな鍛え抜かれた肉体には

色香がある。生物的な歪さと肉体の艶やかなアンバランスは、どこか興味をそそつた。いつだつたか映画で見たギリシアのスバルタのように恥部を隠すだけの装いに、グローブとサンダル。それらは鉢が打つてあり、髑髏のモチーフがあつた。人間の頭骨ではなく、それ、の骨だ。

それ、これ、あるいは、あれ。とにかく吉良はそう呼んでいる。
それは頭を吉良の手で抱かれたまま、両足を畳み、両手を床に着けている。吉良の脚と干渉している部分は、吉良で上書きされていて見えない。

だが触ろうという意思があれば、こうして触れる。と吉良はそれの瞳を覗きこんで思つた。ネコのような縦の瞳孔が吉良を覗きこんでいる。その瞳が吉良を映し出す。合わせ鏡のように、その吉良の瞳にもそれが映つている。

「おまえは誰だ。なぜ、いる。なんの為に」

そう吉良は零す。だが答えが返つてくる事は無い。それに口はあるが、喋らない。鏡合わせの瞳の中のじぶんが、同じようにじぶんに問いかけるだけだ。

目覚ましが鳴つた。止めようとすると、それは消える。消えろと念じるまでも無く、吉良の身体の延長線上にあるような振る舞いを見せる。

脳と繋がる神経のように、ではない。

テレビを点けると、スポーツ飲料のコマーシャルが流れている。走り幅跳びで桟橋か

ら数十メートルほど飛んで海に飛び込んでいた。CGではない。現代では普遍である超常の力、個性を使つたのであろう。

吉良はクローゼットから服を取り出す。明るい灰色を基調としたハリのあるタータンチェックの二つボタンジャケットにスラックスの裾はダブルのツーピース。よくみれば薄らと入つている千鳥格子のボタンダウンのシャツと、スーツよりもほんの少し色の濃い斜めに入つたギンガム模様のネクタイを締める。

腕に沿つて湾曲しているスクエアケースの腕時で時間を確認し、出社の準備をしながら、幾度目かの思考の軌跡をなぞる。

火薬

小学生の頃の身体検査で、吉良は足の小指の関節があるのだと医者に告げられた。個性の発現が遅いので、薄々と感じてはいたがどうやら当たつているらしい。

統計的に小指の関節が有ると無個性なのだ。

だからといって、吉良は苦を感じなかつた。幼かつたからかもしれない。ほどほどに

勉学に励み、サッカーチームに入り、それなりの友人関係を築いた。

だが学年が進むにつれ、コミュニケーションの要素の一つに個性が加わった。やれカツコ悪い、カツコいい、強そう、弱そう、便利不便綺麗不細工。

吉良は個性を持つていなかつた。それほど興味も無い。なぜなら、個性の評価とは相対的な物だ。学業のテストやスポーツの得点のような絶対的評価がある訳ではない。そこに魅力を感じなかつた。だからどうでもよかつた。舐められず、ほどほどにじぶんの実力を示し、かといって打たれる杭にならない手段が明確ではないから。

つまり、吉良の歪な性格である、ささやかな承認欲求を適度に満たすものではなかつた。

個性はあつてもなくともいい。しかし無邪気な子供が、そんな一步引いた吉良のスタンスを見過ごすはずもない。

『吉良あ、おまえ無個性なんだろ』

と、新学年早々にちよつとした悪ガキが放課後の廊下で絡んできた。ほどほどに仲良くなつた新しいクラスメイトは戸惑い、それに気付いた女子が不穏さを感じ取り先生に伝えるべきか迷う。

『そうだよ』

吉良はにべも無く言う。

無個性である事が劣等であるとは考えていなかつた。まだその世代ではなかつたのも起因する。どちらかといふと個性持ちである事に不穏な視線を投げかけられる年代と、それが終わる境目だつたのだ。十数年ほどで一変するが、そんな未来の予期は近くとも理解は遠い。

ともあれ無個性である事が少数派に崩れた頃。吉良が無垢な残酷の餌食になるのは不思議ではない。

『なあ、吉良。じゃあ個性について詳しくないよな、教えてやるから、ちよつと付き合えよ』

ほどほどに仲良くなつたクラスメイトが、砂糖菓子のような友情で口を挟むが吉良はこれを制した。それは、新しい友人を巻き込みたくないという高潔な物ではなく、心のどこかで見下していた人間に助けられたくないという、濁つた自尊心によるものだ。

『じゃあちよつと静かな所に行こうぜえ』

『いいよ』と吉良。クラスメイトに普段通りの口調で言つた。『悪いんだけど、先に帰つててよ』

『吉良くん、ぼく、その、やつぱり』

『いいからいいから、何でもないつて。ちよつと個性について教えてくれるだけらしいんだからさ』

『……でも』

いいからいいから。と吉良と悪ガキは焼却炉のある体育館裏に向かつた。

悪ガキにとつて、吉良をターゲットにするのは丁度良かつた。ヤンチャでもなく、イジメで自殺するほど暗くなく。クラスのムードメーカーというほど人気がある訳でもなく、手を出すとヒンシユクを買うほど弱者でもない。スポーツクラブでも活躍している訳じやあないから女子からの人気が高くもない。

それと同じく吉良にとつても丁度良かつた。

これから無個性で社会を渡つていかなくてはいけない。このようなぐあいで絡まる事もあるのだろう。それを予習できるのは僥倖だ。将来設計は地元の地銀にでも勤めるつもりだ。だから地元で舐められるわけにはいかない。中学校や高校でヘタに負け犬の烙印を押される前に、絡むと手を噛まれるくらいの噂が流れればいい。クラスメイトにも、一人で悪ガキに立ち向かつた度胸のある奴だと思われるだろう。

つまるところどちらとも打算と裏打ちのある行動だつた。それが狂つたのは吉良の方だつたが。

人に向けて使われる個性が、想定よりも強力だつたのは吉良の誤算だ。

悪ガキの個性によつて強化された吐息は、簡単に吉良を吹き飛ばした。ああ、人に個性を使うと、こんなに簡単に倒せるのだ。そう感じた悪ガキはだから、吉良に授業料と

称して金銭を要求した。

『こ、これで個性のヤバさがわ、わかつたろ？　吉良』

骨とか折れてないよな、と。どこかで焦りながら、ゆらりと起き上がる吉良にほつと
して続けた。ドラマや漫画で見た展開を脳裏に描く。

『わかつたよな？　勉強になつたろ』

『ああ、為になつたよ』

吉良はズボンの砂をはらい、拳を握りしめて悪ガキに近づく。

そういうえば、欲しいゲームソフトがあるなあ、と悪ガキははやる動悸で興奮気味に試
算した。

『じや、じやあ授業料払つて、払えよ。塾とかもそうちだろー？　教えて貰つたら金払うも
んなあー』

吉良は有頂天の悪ガキの鼻つ柱を殴つた。

『いってええじやねえか！　吉良あ！』

悪ガキが頬を膨らませて個性を発動し、吉良を吹き飛ばす。フエンスに叩きつけられ
て倒れたので駆け寄つて足蹴にする。

『無個性のくせに殴りやがつたな！？』

悪ガキは半泣きで、うずくまつた吉良を踏みつける。人に暴力を振るうのは初めてで

鼓動が速まつた。

『てええめえ、コノヤロー！ 鼻血まで出でるぞ、これは、イシャリヨーつてやつなんじやないのかあああー！ 医者に診てもらわなくつちやあならない怪我だからなあ、この痛さはあ！』

あ、あれおかしいな。こんなはずじゃあ……頭を庇いながら、吉良は思つた。

マズい、マズいぞ。個性を平氣で人に向けて使うやつがいるんだ。そんな事するバカはいるのか。クソツ！ そんな事をするのは本物の犯罪者くらいだと考えていたが。これは困つた。なによりこの状況をひつくり返きなきや、今後のぼくの人生はどうなる？ 中高とイジメられっぱなしじゃあないのか？

それは困る。実に困る。望んでいない。けれど努力でどうこうなる問題じやあない。個性というぼくの持つていらないステータスの問題だ。

『カネツ！ カネツ！ 蹴るのをやめてほしけりやあカネ！』

そんな要求は飲めない。だから痛みに耐え、八方ふさがりで吉良は考えた。

個性なんていらない。普通でいい、日常を送れればそれでいい。いま、ぼくが欲しいのは、クラスメイトと下校するような、どこにでもある平穏。それでいい、それだけでいい。他に何もいらない。

—— そだつけ？ ——

ふと、じぶんに何かが欠けているのを自覚した。平穏だけ？　ぼくは昔、何か、何かをとても欲していたような。昔って、いま小学生なのにそれ以前？

吉良は逡巡した。逡巡して、じぶんが蹴られていらない事に気付いた。

おそるおそる見上げると、それ、が悪ガキの首を軽々と片手で締め上げていた。苦し
そうにもがいでいる。

大事になるのは困るな、と思うとそれは手を放した。悪ガキが苦しそうにえづきながら、何かを喚きながら走り去った。

それは異形だつたが、不思議と怖くはなかつた。

吉良はそれを個性という事にした。それは他人には見えなかつたので、念力のような個性で通すことにして。

この事件が吉良に与えた影響は大きい。まず、今後は個性がモノをいう将来になるかもしれない。製造業は、それに適した個性を有する者の集団で独占されるかも。技術的な発展も加速するだろう。地銀関係は危ないかもしれない、銀行強盗の問題が付いて回る。

個性やそれによる技術発展の影響の少ない安定した職業。

吉良の出した答えの一つは、法律関係の仕事だつた。

二トロ

これはわたしの脳というより、精神の延長線上にある。

吉良は小学校の頃の事件を想起して考えた。あの時、平穏を望んでいたのだ。決して悪ガキの首を締め上げてやる、などとは思考していなかつたのだから。

つまり平穏を得るという目的から逆算して、あの手段を選んだのだ、これは。

走行中のバスの窓ガラスにペたりと掌をあてがう。それが車外から窓越しに掌を合わせてくる。それは視界が通れば、薄い壁程度の厚みを挟んでも出せる。

これは個性ではない。他人には見えないし、吉良の足の小指には関節がある。目的を叶える手段を行う能力。吉良はそう確信していた。

あの件以降、吉良は文句なく平穏を得た。目立つほどの成績ではないが上から数えた方が早い成績を収め、望んでいた生活水準を満たせる職に就いた。

それでも、あの瞬間に脳裏によぎつた、十二か。平穏の中の一握りの、しかし至上の個人的な喜び。それが昔はあつた気がする。いまは間違いない無い。なんなのだろうか。

しかし小学生の段階で昔はあつたと感じるのだから、それ以前ともなると幼稚園児レベルだ。そんな幼い時に、いま求めていたるナニかを感じ取っていたのだろうか？ 現実的ではない。

それ以前となると、もはやおとぎ話だ。はやりのライトノベルよろしく、前世だの転生だのに近しい。

吉良は浅くなつていく思考に見切りをつけた。

歓喜も無ければ、悲壯も無い。

達成感も無ければ、挫折感も無い。

それがわたしの今の人人生だ。

それでいい。平穀とは均衡の中にある。どちらに傾き過ぎてもダメだ。

満足はしているがしかし、加えてささやかな喜びを望むのは強欲だろうか。それに比例するほんのちよつぴりの苦難や痛みなら甘受しよう。

しかしそれがなんなのか、じぶんが具体的にナニを願っているのかがわからない。

バスの吊り革を持つ女性の手を眺めながら、吉良はぼうっと物思いにふけつた。

やがて駅前のバス停で降りる。近くのビルに構える小さな法律事務所が吉良の勤め先だ。吉良としてはそれほどの収入や社会的地位を望んではいなかつたが、小学校の一件が後押しして選択肢の一つとなつていた。

働いてみれば案外悪くない。民事を主な案件としているので、裁判も極めて事務的だ。稼ぎは他の事務所よりは少ないが、多忙は吉良の望むところではない。

デスクから見える外の景色には、田等院駅で巨大な化物が暴れていた。ほどなくしてヒーローがやってくるだろう。ご苦労な事だ。

まあ、わたしには関係ないが。と吉良は年配の代表弁護士から回された契約書作成案件に目を通していると、一本の電話が鳴つた。

吉良が手に取る、震える女の声が聞こえた。

『あの、ネットで見たんですが、こちらで相談に乗つてくれると。無料で』

ひどく憔悴している感じがある。人材の入流出がほとんど無い事務所なので吉良が一番の新人であるが、数年の場数は踏んでいる。この手の雰囲気にあまり会社会社した事務的な口調は好ましくない。多少ラフな方が相手も安心する。

「ええ大丈夫ですよ。女性の弁護士の方がよければ変わりますよ」ちらと腕時計を確認する。どうせDVだ、すぐに済む。

『その、わたしDVを受けていて』切羽詰まつた口調で短く言つた。『助けて欲しくて』

「まず確認したいのですが、命の危機を感じていますか?」

『それは……いえ、わかりません、でもそれほどでは』

「相手は男性ですか？　ご結婚は？」

『男です、結婚なんて』

「警察の」

『それはダメツ！』

吉良は思わず受話器を耳から遠ざけた。

『ごめんなさい、無理なんです』

「わかりました。同居中の男性に暴力を振るわれている、という状況ですね。話しにくいでしようが、確認の為にお聞きします。暴力に個性は使用されましたか？」

『たまに』

女がすすり泣きだした。

「そうですか、おつらいでしよう。一刻も早くその男性と関係を断ちたいのでしたら、やはり警察の方に相談された方がよろしいですよ。110番でなく、相談課の番号がありますので、そちらに』

『そんな事したら、どんな目にあうか』

「ですがDV防止法等を申し立てるにしても、原則的に警察への連絡が必要です。個性使用の証拠があれば文句なく刑事事件です。何か、理由があればお聞きします。もちろん守秘義務は守ります」

女が意を決して口を開こうとする吐息が聞こえ、ドアの開閉音が遠くで鳴り、それで通話は一方的に切れた。

同居中の男が帰ってきたのだろう。吉良も受話器を置き、仕事に戻った。
 こういった相談は少ないわけではない。胸糞の悪い話、精神衛生面上は好ましくない。だが仕事はそんなものだらうと吉良は割り切つてゐる。たとえばどこかのデパートに勤務したとする。販売員なら訳の分からぬクレームの対応もあるだらう、外勤にしても嫌な営業先を回らなければならぬだらうし、内勤では上司に売上をせつつかれるに違ひない。

それにくらべたら幾分かは精神的に楽だ。被害を受けているのはじぶんではなく、他人なのだから。

昼休憩を挟むと、再び女から連絡が掛かってきた。どうも電話では話しにくいので直接会つて相談したいとの事。時間は今日の夜だつた。

規則正しい睡眠を心掛けてゐる吉良としては断りたかつた。女は民事で済ませたいようだが、いつ刑事に切り替わつてもおかしくない。うちは刑事を得意としていないのであまり力になれないと言いたかつたが、やめた。昼休憩時に数少ない先輩に電話の内容を聞かれたし、冷たいやつだと思われるるのはよくない。それにこここの代表弁護士は女性だ。

待ち合わせは歓楽街にあるファミレスだった。吉良は窓側のボックス席に陣取り、コーヒーを飲む。予定の時刻を数分過ぎると、一人の女性が入店して来た。吉良はすぐにその人物が件の依頼人だとわかった。だぼついたツバの広い帽子に顔を隠すような伸びきった前髪。手袋にツークッショングラスにブーツ。年季の入ったブランドバッグを下げている。

衣類で全身を覆い隠していた。服装は傷跡を見せたくない為か。吉良はとつとつ傷害罪で刑事事件にした方が早いと内心で毒づく。

席に着き、挨拶を済ます。名刺を渡すと、意外にも女も持っていた。くたくたの風俗嬢の名刺だ。

うつむいた女の長い髪の間から、生々しい傷を負った顔が見え隠れしている。痛ましいが、その傷であっても、その奥にはまだ女性の持つ魅力があつた。湿度のある艶めかしい生気のような、形容しがたい濡れた美がある。

切れた薄い唇で、女が言つた。

「……あの、お金なんんですけど」

「相談なので無料ですよ。DV関係の解決にあたつての、金額の一例はこちらです」

吉良が持ってきたパンフを女に渡した。食い入るように見つめている。だが背筋は伸びていた。育ちはいいのだろう。

「何度も同じことを言うようで申し訳ないのですが、やはり警察の方に……」

と言いかけたところで、吉良の隣に一人の男が無遠慮にドカリと座り込む。女がはつとして顔をあげ、震える瞳で男を見る。

「おめ～よお、なに勝手に早退してんだよ。店からおれの方に連絡あつてよお、迷惑かけんなや。え？」

「ジ、ジめん。でも、こんな顔じやお客様取れないし」

「は？ てめえが稼げねえのはおれが悪いってか？」

「そ、そうは言つてない」

深夜という事もあり、また人の目があるので男の声はひそやかなものだ。しかし女を人として見ていないような責め口調。

「きみは誰だ」と吉良。隣に座ったスウェットの男に言つた。

「あ？ てめえこそ誰だ？ こいつと同伴か？ あんま首突つ込むなや、じやねえと」「じゃないと、どうなるんだ」

吉良はコーヒーを飲み干す。男は女が持つていたパンフに目をやり、舌打ちして立ち上がつて言つた。弁護士と事を構えるつもりはないらしい。

「おい行くぞ」
女はパンフを眺めたまま動こうとしない。

短いしひれを切らした男が女の細い手首を掴むが、女はソファから崩れ落ちる。

「おれに迷惑かけんのも、いいかげんにしろよ」

吉良は手の甲でコーヒーカップのソーサーごとテーブルから押し出した。床に落ち、割れる音が広いファミレスに響く。男と視線を交わす。

「わたしのクライアントなのだがね」

一人か二人いた客が視線を向け、すぐにホールが、大丈夫ですかーとやつてくる。男は舌打ちで店を出た。

まつたく、嫌な夜になつたと吉良は辟易する。強いストレスを覚えた。

まあいい、これ以上は弁護士としての領分を超えている。警察に行きたくないなら、そうすればいい。脛に傷があるのだろう。それで損をするのはわたしではない。赤の他人の憐れな女。

「今晚からはあの男とは別の場所で寝泊まりした方がいい。アテはありますか？ 携帯も手放すべきかもしれません、あの男はおそらくGPSを辿ってきた」

吉良はへたり込んでいた女に、手を差し伸べてやつた。あ、と女が口から零してその手を握る。握ろうとするが力が入らないのか吉良の指が滑り抜ける。吉良にはそれがひどく印象的だつた。

手首を掴み、肩を引き寄せて立たせた。

「え、ええ、大丈夫です。ご迷惑をおかけしました」

——ありがとう——

と女は消え入りそうな声で続けて言つた。それだけ言うと、右足を庇うような歩き方でファミレスを出た。吉良から貰つたパンフを痛痛しいほど握りしめて。

吉良はソファに座り直し、やつて来たホールにカップは弁償する旨を伝え、コーヒーをもう一杯注文した。あの様子だと、明日にでも連絡が来るだろう。

そして女を引き起こした時に触れたじぶんの右手をじつと見やる。手袋越しの、弱々しい指の感触がまだそこにあった。

たつたそれだけの事が吉良の心に色濃く刻まれた。これは妙だと自己分析する。

倒れた人間に手を差し伸べただけ。たつたそれだけのたわいもない事だがしかし、思ひ返せば人生でそんな事は一度も無かつた。

そんな小さな出来事で、灰色で固まつた人生に鮮やかな雲が落ちてきたような気分になつた。当然、明日には灰色に飲まれるだろう。だがそれでよかつた。

もしも受ける情感が強大ならば、中毒のようにそれを求めるだろう。そうして厄介ごとに首を突っ込むようになる。

小さく爆ぜて消える花火のような心地よさでいい。

弁護士という仕事がら、デスクワークで人の助けになる事は多い。だが実際に身体を

動かして助けになる事は無かつた。

わたしが欲していたモノは、案外これなのかもしない。いやきっとそうだろう。女の手を取つた時、確かに満たされた。

倒れている人の手を取る。

か、と吉良は心中で宝石を転がすように唱えた。

それは偽善だとか、自尊心や承認欲求だとかの俗物のそれかもしれない。それでいい。本物の善を行ふほど、わたしは強くないのだ。手の届く範囲で、余裕があつたらすればいい。

吉良は人生における一つの回答を得たことに多幸感を覚えた。

長生きはしてみるものだと店を出て、自宅に戻り、死んだようになつぶりと寝た。

そうして翌朝に目覚める。

第二話 男殺しの女王

導火線の短いダイナマイト

起床とは簡易的な誕生だ。吉良はまさしく生まれ変わった気分。なんともすがすがしい。幼少の頃よりの疑問が晴れ、これからは平穏に加えてささやかな幸福に触れる事も出来る。

上機嫌で、コーヒーメイカーがコポコポと音を立てていてそれを聞きながら、藍と紺の細かいストライプのワイドカラーのボタンを留め、くすんだ赤のニットタイを締める。リネンのラフなカーキ地にアイボリーのウインドウペンのスーツを羽織つた。

出社し、任されていた契約書を仕上げる。その傍らで、ちらとデスクの上の携帯端末を盗み見る。どこかでの女に期待しているのだ。助けるという行為を実行する機会を。

だが結局、その日は女からの連絡は無かつた。

妙だな、と吉良は訝しむ。あの様子だと警察に届け出ではいないだろう。個性犯罪はマスマデイアのオヤツだが、ニュースにもなつていなし。別の弁護士を雇つたか、姿をくらましたか。

その翌日。なんとなしに女から渡された名刺を見やる。角は曲がり全体的によれていて、コーヒーカ何かの染みが小さく残つてゐる。裏には手書きで個人のと思わしき番号。仕事終わりに公衆電話から掛けてみるが、応答はない。携帯端末で店の名前を検索すると、歓楽街のソープだ。弁護士バッジを付けて女の名刺を出すと、すぐに店長が出てきて、あつという間に女だと特定できた。なんでもちよつと前までは界限で有名なナンバーワン風俗嬢だつたらしい。多くの男を虜にしてきたとかなんとか。クライアントだと伝えると、面倒ごとを嫌つてか稼ぎ頭が消えた理由が知りたいのか、あつさりと本名と住所が割れた。昨日今日と無断欠勤らしい。二駅離れたアパートへ向かう。表札は女の物だつた、という事は男はヒモか。ノックするが、応答はない。外へ回つてみるとカーテンが掛かつてゐる。夜だというのに電気は点いていない。妙だ、同居している男の元へは帰らない方が言いと伝えたので、少なくとも男は居るはず。吉良は腕時計を確認する。そろそろ帰つて寝ないと睡眠前のストレッチの時間を削る事になる。吉良は周囲を確認してからドアスコープ越しにぼんやりとした室内を覗いて、それ、を内側に出し、鍵を外させた。ドアを開けるとほのかに甘く、酸い香りがする。台所のシン

クから虫の羽音が聞こえる。鼓動が速まる。靴を脱ぐことも忘れて上がりこむと薄暗い部屋の中で女が血だらけで倒れている。酒瓶が転がっていた。乾ききつた黒い血を踏みしめる。近づくと地を這う虫が女の身体から数匹逃げ出した。うつ伏せに倒れている女の頭部は割れ、黒く長い髪は血で固まっている。

吉良はそつと、死んだ者の手を取った。ひどく荒れていて、甲には幾つものタバコの跡があつた。

ほんの少し指を握つて手を放せば、こてり、とフローリングの床に落ちた。先日の夜のような、か弱い力は感じられない。

もう一度同じように指を握つて放す。こてり、とフローリングの床に落ちた。吉良はそつと涙と血でぐちやぐちやに崩れた化粧の女の顔に手をやり、見開かれた目を閉じて、通報した。

キラーケイーン

第一発見者という事もあり、吉良は警察の聴取を受けた。担当したのは塚内と名乗る

刑事だつた。

吉良の目には三十代前半に見えた。その歳で刑事なら、相当な切れ者に違いない。

「で、部屋の鍵は開いていたと」と塙内。ペンの頭でじぶんのこめかみをつつきながら、書類に目を通して言つた。

「ええ、二日前にファミレスで取り決めていた定時の連絡が無かつたので不審に思い、住所へ向かいました。インターほんを鳴らしたのですが、応答が無かつたのでドアノブを握ると鍵はかかつていませんでした」

「で、なんで入ろうと思つたの？ 普通は鍵が掛かつてなくとも、勝手に入つちやあダメでしょ」

「ドア越しに腐臭がしました。DVを受けているという事実と合わせると、最悪の場合を考慮したまでです。不法侵入で捕まりますか？」

「まさか、わかつてゐるくせに、きみは弁護士だろ？ それにしても鼻が利くんだねえ。春先の気温とはいえ死後二日で、空気清浄機は点けっぱなしでしたのに。」

「では、なぜ聞くのですか。腐乱状況から見て、少なくとも第一発見時に殺害したものではない」

「聞かれちやあマズいかい？」

「いえ」

「ま、一応、調書は作つとかなきやあならない。どんなに犯人とは遠くともね。個性は何でもありだから。きみが死体を腐らせる個性を隠し持つてはいるとも限らない訳だし、悪く思わないでくれ」

そう言われると、吉良は言い返せなかつた。代わりの言葉を紡ぐ。

「それで、犯人の目星はついているのですか」

「まあね。どちらにせよ、証拠が無いけど

「そういえば二日前にファミレスでクライアントと会話中、スウェットを着た男が割つて入つてきました」

「ああ、知つてゐるよ。店内の監視カメラで確認した。そいつ、前科があつてね、個性は割れている。離れたところから物体を動かせる。で、浴槽にはPCが沈められていた」
塚内が言いたいのはこうだ。男はアリバイのあるところでPCの映話を通じて女の位置を確認しながら、ビール瓶やなんかの凶器を動かし、暴行を加えた後でPCを動かして風呂に沈めて証拠を隠滅した。

「きみのところの事務所は民事を主に担当しているから明るくないかも知れないけど、まだ個性犯罪に対する法整備は十全じやなくてね。警察内部の情報収集に長けた個性を持つ警官を使って水没したPCの情報をサルベージできるんだが、個性を用いた捜査による証拠の法的信用度は低い。一昔前の指紋の扱いみたいなもんさ」

「なぜ？」

「生まれながらに特定の捜査に特化した個性を持つ人間を重宝すると、採用の段階で不公平が生じるから。それは体力や頭脳と言った、努力でなんとかできるレベルじやないから」

「そうですか」

「ところでサルベージしたPCの映話では、被害者のドアの鍵は閉まっていたんだけどこいつ、と吉良は固唾を飲むのをなんとか堪えて言った。

「では、犯人が一度現場に戻ったのかもしれませんね」

数秒の沈黙の後、塚内が話を戻す。

「ま、公的組織だからね。こういった個性犯罪は増加していっているし、今度の予算案からかな。人と金を確保できるのは」

吉良は刺すように短く言つた。

「ひどく他人事だな」

「公僕が私情で動くわけにもいかないし、僕は立法の人間じゃない。そこ間違えると、行政はハリボテになる」

「今回の捜査は？」

「解決は近いだろう。犯人の男は特定できているし、後は警察がサルベージしたPCの

情報が、たまたま電子クラックが得意な個性のヴィランの手によつて流出し、それをたまたま見つけたヒーロー達の手によつて」

吉良は口をつぐんだ。塚内を責めるのは間違えている。現場の彼とて現状に納得はいつていはないはずだ。だからこんな遠回しの危うい手段を使うのだろう。そう納得した。

現体制にはまいるよね、はつはつはつ、と乾いた笑いの塚内の大きな目は、全く笑つていなかつたので。

吉良は数日の有休をとつた。事務所の方としては古い付き合いの紹介を受けて、定款の作成を吉良に頼むつもりだつたが、吉良の同僚が引き受けた。

同僚曰く、クライアントが死んだとあつては心労も積もるだろう。もともと仕事はマジメでそつなくこなす。そんな有望な後輩が潰れては困る。ならゆつくりと旅行にもいつてメンタルケアをしてもらつた方がいいさ。と。

そう。心は、癒さなければならぬ。

吉良は例のソープ店に向かい、風俗嬢に話を聞くとすぐに男の素性が割れた。どうも何人かの女性に貢がせてているらしい。評判も悪かつた。

男は最近入り浸つて いる女のアパートの鍵を開けようとし、キー ホルダーをスウェツトから取り出した。何本も束ねられていて煩雑 そ うだ。その内の一本を鍵穴に差し込み、 そ ういえ ばと、もう使う事はない鍵をキー ホルダーから外す。

部屋の主は夜とい う事もあつて仕事中で い ない。男が暗い室内の電気を点けると同時にギヨツとした。

「なん! だおまえ……こないだの」

パツと明かりが広がり、生活感のある部屋に吉良が立つて いる。格子の無い、シンプルな淡い紫の三つボタンジャケットに薄いエメラルドグリーンのシャツ。同色のUチップシューレースを履いて いる。

「たぶんだが、これが挫折つてやつなのかな」

吉良は顎に手をやり、男から視線を外すことなく続けた。

「それとも絶望なのかもしれない。どちらも深く味あわされた事がないから、区別がつかないのだよ。とにかく暗い気持ちだ。例えるなら、心臓の中の血がサツと蒸発しちまつたつて感じかな」

「なんだてめえ、おいこら弁護士なんだろ、なに勝手に人んち入つてんだコラ」

ずかずかと男は詰め寄つて胸ぐらに手を伸ばす。

吉良の頭の中で、塚内の言葉が明滅する。

——吉良さんはこの件から降りた方がいいよ。もともと、被害者と契約は結んでないんでしょ——

男はどうしてわたしの平穏の中の、せつかく見つけたほんのちよつぴりの幸福に水を差すのだろうか。

——なんでって。たぶん警察に駆け込んでこなかつたのはね、まあ彼女自身の保身もあるだろうけど——

それ、が男の頬を殴り抜き、即座に吉良の背後から飛んできたテレビを叩ッ壊す。

「な!」

完全に不意打ちをしてやつたと思つていた男が驚愕し、同時に背後の壁に血がぶちまけられた。その拳が鳩尾を貫通したのだ。男はゲロのように吐血する。その腕がずるりと引き抜かれ、どさりと尻餅をついて壁に寄りかかる。

「なんで、こんな。あの、女を、たかがあんな、殺した、からか?」

男は息も絶え絶えで言つた。脂汗をびっしょりとかいて。

「なにもんだ、あんた。おれが誰だか知つてんのか……おれは」

——男は死穢八斎會の構成員だからね。名前くらいは聞いた事あるだろ? 彼女、報復が怖かつたんじやないかな。ああ、一応忠告はするけど、きみはヒーローじゃないから、関わると面倒ごとになるかもしねない——

「おれは死穢八斎會のもんだぞ。おれを殺したのが組にバレリやあ、あんた、終わりだ。
死んだ方がマシだつて、思う、ようによ」

吉良は黙つて男を見おろして考へる。

わたしは別にあの女に恋愛感情だとか、会つたばかりの人間にそれほどまでの義理人情を感じるほど篤い訳ではない。

ただ、わたしに幸福を感じさせてくれた人間が、わたしの不注意で死んでしまつた事に強い敗北感を感じてゐるだけだろう、それがこの胸の奥で黒く渦巻く感情の出所だ。

それしかわからない。だからそれ以上になぜ? と自問しても答えは無い。理由も無く、生まれながらにそれをされると憎惡の情感が湧きだす。ただのそれだけ。サガつてやつなのだろう。

それにしてもあの時、ファミレスで別れる前に一言かけてやればよかつた。そうすれば死なずにすんだかもしない。別の所に泊まるアテなど、本当は無かつたのかもしない。ファミレスを出たところで、男が待ち伏せていたのかも。タクシーを呼ぶくらいはしてやつてもよかつた。

男がヤクザもので、以前誰かに助けを呼んだ時に迷惑をかけてしまつたのかも知れないし、警察を頼つたのがバレてひどい目に会つた過去が?

彼女は、その迷惑をわたしにかけたくなかつたから、結局一人で抱え込んだのかも。

姿勢は良かつたからいいところのお嬢さまかもしれない。それがどうして歓楽街で唯一の風俗嬢になつたのかも。

そのすべては仮定の話だ。

「きみのせいだ。きみの責任なのだ。きみがわたしに深い絶望を与えたから、その埋め合わせをしなければならなくなつたのだ。均衡がとれてこそ平穏なのだから」

「あの女は、あんた、の？」

「彼女に特別な感情は無い。たぶんな。言つただろ、彼女を失つた悲しみなのか、クライアントを見捨てた仕事上の挫折なのか、どちらも避けて生きてきたから判断がつかない。ただその結果として、わたしにささやかな幸福を与えてくれた者が傷つけられ、殺されたという事が問題なのだ。それが堪らなくわたしを不快にさせる」

男は涙ながらにじぶんを道具のように見下す吉良を見上げて思つた。訝、わかんねえよ。マジでこいつ頭が……

「た、頼む。名前を、教えてくれ。知つておきたいんだ、おれを殺したやつの、名前くらいは」

「そうか」

男は吉良の死角でペンを操作していた。本当はそれを首元に突き刺してやりたかつたが、おそらくはテレビの二の舞になるだろう。ならばせめて名前だけでも残し、組に

報復させてやるという腹積もりだ。

しかし、こいつの個性は一体何なんだ。急に殴られたという感覚があつた。背後からの奇襲も看破した。背後を見張っているやつがいるのか？ クソ、こいつは一步たりとも動いてねえんだぞ！

吉良はスーツの内ポケットから一枚の紙片を放つた。ひらりひらりと男の血だまりに落ちる。

男は失血で霞む視界の中、なんとか手に取り、確認する。確認して、マヌケな声をあげる。

「え？」

「それがきみを殺す者の名だ」

奇妙な現象が起きた。紙片を触った男の指がボコリと膨れ上がる。そこを起点に手、腕と浸食するように次々に歪に膨張する。

男が叫び声をあげようとするよりも早くそれは体中に広がり、膨張が臨界を超え、爆ぜる。肉片や血が飛び散る事も無く、男の肉体は爆発して消え去つた。ぼとりと落ちた左手だけを残して。

吉良は爆風でふわりと浮かび上がった紙片を、女の名刺を掴む。空いた手を、じぶんの顔のすぐ隣に浮かぶそれの頭部に下から回して首を抱いた。それもまた吉良の首と

腰に手を回す。

「キラーケイーン。わたしはこれにそう名付ける事にした。今回の挫折と敗北を、忘れる事の無い警句と戒めにする為に」 血の華が咲いている壁に向かつて言い捨て、ドアに向かう途中で名刺を爆破させる。「多少は気が晴れたとはいえ、まったく、不快だ。これほど暗い気分になつたのは、平穏を心掛けるわたしの人生の最大の汚点だ。二度とこのような事が無いようしなければ……二度とこのような気持ちになる訳には……」吉良はぶつぶつと帰路につきながら再考する。やはり、キラーケイーンはわたしの目的を叶える手段を持つている。対象を爆破し、消し飛ばす能力。それも一部だけ残すと言つた器用な事も出来る。だが、もう荒事に使う事は無いだろう。そんなトラブルは回避か未然に防ぐに限る。

そうして暖かい牛乳を飲み、ぐつすりとはいかないほどほどの睡眠を得る。次に倒れている人の手を取るのがいつになるのかを考えながら。

そうして吉良は、つかの間の平穏を過ごした。

後日、ニュース番組で男の死が報道されていた。ヒーローの掴んだ情報と合わせると、二日前の女の殺人犯だという事がわかつた。へえ、とSNSのトレンドに載っていた記事を見て、興味深そうに呟いた一人の女子

高生がいた。両サイドをお団子で纏めた、どこにでもいそうな女の子、と言つた感じ。スタバで呪文のようなフラペチーノを一口やつて、適当なまとめているスレッドにいいねを押す。

一人の死穢八斎會の構成員が、携帯端末に言つた。

「あ、おれです。やっぱり殺された若い衆が貢がせてた嬢に、例の弁護士が会いに来て話聞いてたみたいですね……はい……はい……わかりました。失礼します」

通話を切り、ある弁護士事務所のパンフを眺める。

「吉良吉影、ね」

呟くように言つて、弁護士紹介の欄にある顔写真を眺める。

この個性犯罪には、奇妙な点があつた。左手だけを残して遺体も残らず消し去る個性が使用されている。にも拘わらず、なぜ男を失血まで追いやり、身体の一部を残したのか。単純に殺すのであれば、血を流させず全身を消し飛ばせばいい。なのに、なぜ？
その理由を塚内はおおまかにだが掴んでいた。

事件の一戻の解決と同時に女の素性も割れた。行方不明だつた、どこかの地主の一人娘だつたらしい。両親は遺体を引き取ると同時に、犯人である男に対して錯乱に近い激しい憎悪を抱いた。

立ち会つていた塚内は見かねて、そつと耳打ちする。報道はされていないが、男は失血死相当の血を流し、現場には切断された左手だけが残つていた、と。おそらく残酷な殺害方法が行われていたのだろう、と。

そう、犯人は心の平穏を求めていたに違ひない。

それを聞いた両親が何とか留飲を下げている姿を見て、塚内は推察を確かなものにした。

第三話 地獄に通ずる門

吉良は出社してすぐに、先輩の同僚のデスクに向かつた。

「この間はありがとうございました。私が有休を取つた時、代わりに定款の作成を引き受けてもらつたばかりか、刑事事件に詳しい方まで紹介していただいて」

「ん？　ああ、いいよいよ。勉強熱心で感心した。それにきみ、あんまり有休消化しないだろ。たまにはまとまつた休暇で、ゆつくりすればいいさ」
気にしてないと言つた風に同僚は話題を変えた。

「そう言えば吉良くん、服の趣味変わつた？」

言われて吉良は自分の身体を見下ろす。サックスブルーのスーツに淡いエメラルドグリーンのシャツ。藤色のタイにブラウンのスウェードのUチップを履いていた。

「そう、ですか？　あまり意識してませんが」

「ちよつと前までは格子柄が多かつたからさ」

言われてみれば、そんな気もした。人生をほんのちよつぴり彩る幸福を発見できたせいか、無意識的に開放的になつたのだろう。文字通り、格子から放たれたような。

「ま、今日からまた頑張つて経験を積んどいてくれよ。法曹界じやあ、個性を用いた捜査

の法的信用度を見直した草案が作られてるって話だ。施行されれば忙しくなる」
言われて吉良は苦笑した。

夫の浮気現場を個性で念視したので、それを証拠に離婚裁判を起こしたいという相談
を、眞面目に聞かなくてはならなくなる。

火薬

麗らかな春の日差しがさす早朝は、八斎會の部屋住みにとつて変わらぬ日常を感じさせた。

先日、碌に部屋住みもしてないくせに兄貴風を吹かせる新参者が殺されたと聞いて、
いい気味だと思うと同時に肝を冷やした。その不穏に縮こまつた心が、ゆっくりと溶か
されていくようだ。

まあヤクザ者をやるなら、そういう事もあるのだろうと自分の事を棚に上げ、自分だけは死ぬはず無いと無意識する。

あれは事故のようなもの。このご時世に抗争なんてありえない。大方、貢がせていた嬢に刺されたのだろう。

短髪の、身なりの整った青年、治崎 廻がソファにたつぶりと腰を落としている。襟羽の小さな光沢のある暗い灰のストライプ柄のシャツに、濁つた赤い細めのタイ。黒のタイトなスラックスを履いている。若年という歳にもかかわらず、都内最大の暴力団組織の若頭という地位にいた。それだけでなく、今では実権を握っている。

隣の肘掛けには小さなぬいぐるみと、後ろにはスキンヘッドの男が控えていた。そのままぽつりと治崎が言つた。

「いくら組織が小規模になつたつてよ、部屋住みもしてない半グレに杯やるから面倒ごとが起きる」

彼の抱える八斎會は、看板こそ掲げているがヤクザというよりは地下に潜つたマフィアに近い。表立つて暴力団であるという事を主張せず、構成員は一見するとただの給与人にしか見えない。面倒を起こしたくない重要な時期でもあるからだ。そんな時にこそ厄介ごとは降りかかる。

八斎會の若い衆が殺された。

若い衆と言つても、治崎が悪態を吐いた通りの半端者だ。

第一発見者のヒモ相手である嬢に話を聞くと、報道されていない情報を得た。大量の血と手だけが部屋に残っていたらしい。ヤバい個性の使い手に殺されたという事だ。

「おまえこれどうするつもりだ」

対面に座る中年の幹部は、申し訳ありませんと形式儀礼的に頭を下げた。幹部の後ろに控えている付き人は気が気ではない。次の瞬間にも兄貴分が殺されるかも知れないのだから。

「若いのは死んでるんで、使用者責任を問われる事はおそらく無いとは……」

この狸が。治崎は内心で幹部を呪つた。殺してやりたい。だがオヤジの元側近という事もあり、迂闊に消す事はためらわれた。培われた経験や、マル暴との繋がりもある。ヒーローが跋扈するご時世で生き残っている暴力団は、数少ない。中でも八斎會は最大勢力だが、組織は一枚岩とは言えなかつた。植物状態で実権を失つた組長派と、その原因を作つたであろう若頭の治崎派で割れている。

構成員の多数は昔氣質のシノギを重んじる組長派で、ヤクや非人道的なシノギに手を出す治崎派を支持する者は少ない。

それでも組織としてなんとか機能できているのは治崎の恐怖政治と、両派閥とも本質は組の永続と発展、そして組長の回復を望んでいるからだ。

組長派は、おそらく植物状態にした犯人は治崎だと気付いている。だが証拠が無い

し、植物状態を回復させるには治崎の個性が必要だ。だから一応は協力する。親分をいよいよにされて黙つて従う子分に甘んじるしかない。

このままではいずれ瓦解する事は両派閥も理解している。だが、水面下では相容れない。

「しかし、今回の殺しが半グレ集団か、ただのチンピラか、それとも新興の同業者なのか……ま、どれでもええですが、とにかくそいつが反社の手先で、その仕業だとしたら、力エシも無しだとつけ上がるんじゃないですかね。いや、波風立てたくない時期つてのはわかります。でも、これからうちのがポンポンと殺されやせんですか」

「音本を使つて確認しろってか。あいつの個性は替えが利かない、万一があれば事だ。痴情のもつれだろ」

「そうですか。日星はつけたんですけど。吉良吉影つて弁護士が若いのの素性を探つてたみたいで、ツラも住所も割れてるんですが」

最初からそう言え、表には出さずに治崎は毒づく。大方、揉めた末に自分の意見を通したという事が欲しかったのだろう。

「なら話は別だ。その吉良つてのを囮い込む」

暴力団が大きく弱体化した理由はヒーローの登場と、それに憧れて学生時代に逸話を作ろうとした学生の的にされたというのが通説だ。当時の暴力団は、特に後者について

の対応に手を焼いた。相手は素人、それもガキ。迂闊に手を出せば使用者責任で上がトブ。そして暴力団だからこれを叩くことは正義だ、というクリームのように曖昧な雰囲気があつた。

だが真に深刻だったのは、それが暴力団の抱える弁護士にまで及んだという事。

この社会情勢を機と見たのは警察と検察だ。手口としては、私服警官がお抱えの弁護士に貼り付き、自称ヒーローに絡まれていざこざが起きたところを現行犯で引っ張るやり方が多かつた。

暴力団の顧問弁護士は、ただでさえ弁連や弁護士会から白い目で見られている。大衆からもそうだ。暴力団は悪であり、例え弁護する者であつても助けようとするならば悪であるという風潮。

そのような訳で、暴力団が弁護士に付き人を用意するまでの短い間に多くの弁護士がパクられ、辞めていった。新たに雇われるしたら、よほど醉狂人だ。

暴力団として扱われば、ローンは組めないし、まともな葬儀場も借りられない。子供は保育園を追い出される。妻子の名義で建物を借りれば犯罪だ。

そして誰が暴力団員かを認定するのは警察の独自の裁量によるものなのだ。弁護士だろうと、なんだろうと。

八斎會もその例外ではなく、その煽りを受けた。顧問弁護士の一人や二人は抱えてお

きたい。

「下部組織のちやらんぽらんどもは使うな。音本に任せる。本当に殺したのなら弱みを握らせる」

「有無を言わさぬ治崎の凍てついた口調に、幹部は表面上はしぶしぶと従つた。本当は生きた心地がしなかつたのだ。」

「そうですか、まあカシラがそう決めたんなら、私の絵面でしたが諦めます」

「それだけ言つて、幹部は付き添いを連れて部屋を出た。それを認めると、治崎は隣の人形に尋ねる。

「どう思う、入中」

ふうむ、と入中と呼ばれた人形が顎に手をやり、答える。

「仮に吉良が半端者を殺していたのなら儲けものです。盗聴撮しながら音本の個性で言質を取れば、うまく引き入れられるでしょう。あまり性急になるのは勿体無い案件です」

「そうか。音本にはくれぐれも気を付けるように伝えろ。相手はイカれた個性使いだ。必ず日中かつ第三者に助けを求められる状況で接触しろ」

「それだけ言うと、治崎も席を立つた。部屋を出て地下に降り、曲がりくねつた廊下を歩いて厳重にロックされた分厚いドアを開ける。

そこには、大病院の手術室をそのまま切り取つたかのような十分過ぎる医療設備と、精密な化学工場がごつた煮にされた閉鎖空間があつた。手術台には一人の少女が諦観の表情で照明を見上げている。

「それじやあカシラも来たのでエリお嬢さん、失礼しますよ。組の為ですからね」

医師らしき男がそう言うと、麻醉で、くてつ、としたエリの白い傷だらけの前腕に浅くメスを入れて、適切に四角く面積を取つた。酸化していない赤い血が、じつとりと縁取るように珠を作る。それをガーゼに軽く吸わせてから一角をピンで軽く持ち上げ、切開用の小さなハサミを閉じたまま差し込み、開くことで表皮とその下の真皮を切り分けた。

そのまま、ぐつ、ぐつ、と引つ張りながらハサミで切り取られた表皮は、銀のトレイにべたりと置かれた時にはたわんでいる。

施術痕には冗談のように新鮮な赤い肉がぬらりと照明を反射し、僅かに凹凸を作る毛細血管や筋に混ざつて、皮下脂肪が白く所々に見え隠れしている。

この行いが悪為なら、だからエリの白い腕は地獄に通ずる小さな門が唐突に開いたようだつた。長方形に象られた向こう側の景色はきっと、鬼が造る赤い、赤い赤い艶やかで無惨な人だつた肉にまみれているに違ひないのでから。

白い傷だらけの前腕に浅くメスを入れられ、適切な面積を取られる。

エリは、ぶつぶつと纖維が剥離され、じやきじやきと自分が切り剥がされているという感覚に、虚ろな双眸から零をこぼした。

一段落着くと少女の首から下は、クツキーの生地に抜き型を嵌められた残りカスのようになっていた。染み出た血液が乾燥し、色を変えている。

その様子を、ガラス越しに治崎はじつと眺めながら思った。エリが成人女性なら、もつと切り取れる面積が増えて効率的なのだが、と。

溜息を吐き、手術室に入つて個性を発動させる。エリの体躯が修復されたが、腕の傷は残つてゐる。治崎はあえてそうしている。そうすれば、エリは自分が何者であるか、どういった存在意義なのかを視覚的に理解しやすいと考えたからだ。

白い傷だらけの前腕に浅くメスを入れられ、適切な面積を取られる。

もう一段落着くと少女の首から下は、クツキーの生地に抜き型を嵌められた残りカスのようになつていた。

治崎が個性を発動する。エリの体躯が修復された。地獄に通ずる門が、開かれる。人の手により。

後日、治崎から合切を任せられた音本は八斎會のフロント企業の名を使い、吉良を指名し、就業規則の作成を依頼した。

時刻の五分前に事務所に到着する。

音本は前髪をゆるやかに上げた七三ヘアで、物憂げに垂れたまつすぐな眉、それに反してハーフスリムのメガネの奥の瞳には、深い意思を感じさせる。

ライトブラウンのグレンチエックの二つボタン。ボタンは袖口のも含めて、ダークブラウンの革のくるみだつた。それと同色のペイズリー柄のタイと、磨かれたチエルシーブーツ。よくみれば気付く程度のピンクゴールド色のシャツを着ていた。

吉良は簡単なあいさつを済ませて、事務所内のプライバシーを考慮した個室に案内し、お茶請けを持つて来てもらう。

その後、改めて名刺を交換する。

吉良が受け取った名刺には、木本とあつた。ちらと相手の表情を見やると、愛嬌のある笑みを返される。

契約はつつがなく結ばれた。音本からしてみれば、つまらない予定調和だ。会話の節で金や女等、引き込めそうな要素を探つたがそういった欲望は無さそうだつた。頃合

いだな、と個性を発動し世間話を切り出す。

「そういえば先日、この近辺で人が殺されたそうですね。ニュースでやっていた、あれですかねえ」

その音本の問いに、吉良は望まぬ真実を吐いた。

「わたしが殺した」

戸惑う吉良を見て、フツと音本が笑った。彼の個性、真実吐きによる問いかけは、強制的に真実を語らせる。

「なるほど、なるほど、やはり」

「……とでも思つてらっしゃるようだ。悪いが、おかえりいただこう」

音本は、さぞ動搖しているだろうと思つていたが、予想に反して吉良は冷静だつた。意に反した発言をする自分自身に戸惑いを覚えはしたもの、なんとか取り繕つている。というより、敵を見る目をしていた。

こういつた切り替えが一瞬の精神構造の人間は手強いと経験から察したが、第一段階は終了している。あとは退散するだけ。

「ええ、ええ、そうですね、続きはまた今度、ゆっくりとりますか」
勝ち誇った顔で続けて問うた。

「あなたの個性は」

「無い」
「え？」

その想定外の真実は怪訝だったが、ネタは握れた。追い追い尋ねればいいと、音本は事務所から出て待たせてある車に乗る。

「ご苦労様です。カシラのどこで？」

音本の眼鏡には小さなカメラが付いている。吉良の白白の瞬間は抑えた。刑事案件における盗聴撮の証拠能力は厳格な審査があるが、八斎會は起訴が目的ではない。これをネタに吉良に首輪を付けたいだけ。同僚や上司の玄関に先の映像が入ったUSBが置いてあれば、困るのは吉良だ。

「うまく行きましたか？」

「うん？ ああ、だがやつが無個性というのには驚いた」

すぐにでも治崎に電話で伝えたかつたが、裁判所の許可があれば警察は盗聴を行える。エリの事を勘付かれる訳にはいかないので、基本的に重要な案件の連絡に電話は禁じられていた。

音本は一仕事を終えた気分で肩の力を抜いた。無個性の人間が、手だけを残して遺体を消す事は不可能に近い。つまりあの現場には、協力者が居たのだろう。ヤバい個性の使い手が。そう考えるのが自然だ。上手くすれば、そいつも八斎會の駒に出来るかもし

れない。

そう考えながら、首元を緩めようとネクタイに触れた。ただそれだけだつた。
運転手がルームミラーを見やり、音本の消失に気付いたのは次の赤信号で停止してからだつた。

吉良はその日の業務を片付けながら、なんとなしに幼少の頃を思い出していた。
なぜ人を殺してはいけないのか。大人を困らせようと、そんな質問をしつこく投げかける生意気な同級生がいた。返つてくる言葉と言えば、モラルだとか、法だとか、人間性だとか、とにかく色々ある。

だが吉良は今日、そういうつたものよりも納得できる回答を得た。

なぜ人を殺してはいけないのか。

面倒な事に、二人目以降を殺さなければならぬからだ。

こうなる事は薄々、予測していた。

だが仕方が無かつた。

よく人生はレールに例えられているが、あの時、八斎會の男がファミレスに現れなければよかつた。あの男が吉良のレールの上に飛び出してきたようなもの。そうとあつては轢殺するより他にない。

そうしなければ、平穏という道を外れてしまう。

弁連や弁護士会の伝手を頼つて、検事や刑事事件に詳しい弁護士を当たつて八斎會の詳しい現状を調べるに、治崎という青年と取り巻きの八人の鉄砲玉が牛耳つているらしい。しかも少数派。何人か削れば報復どころではなくなるだろう。

今の事務所を離れるという事は考えられない。同僚は接しやすく、老舗で地元企業と密接しており安定した収益がある。色気を出して事業拡大もしていない。そして吉良は、労働環境がとても気に入っている。

忙しい時は残業もあるが、基本は定時に帰れて給与もまあまあ。だからか人材の入流出がほとんどなく、信じられない事に人材募集は約十年ぶりだつた。ツいていた。ここに就職できて本当によかつたと思つてゐる。あとはもうちょっと近場に自然があれば完璧だが、それは望み過ぎというものだ。過分は均衡を崩す。均衡がとれてこそその平穏なのだから。

だから、と吉良はビルの窓から夕暮れの街並みを眺めて、内心で独り言ちる。
だから、わたしを追う者には死んでもらう、と。

「これ、いま塚内さんが追つてる左手事件の調査結果です」

早朝。目立たない普通車の運転席に座る猫の頭部をした猫人間の玉川が、助手席に乗り込んだ塚内にファイルを渡す。

「ありがとう。相変わらず仕事が早いね」

「僕じやなくて鑑識が、ですよ。出しますね」

ゆるりと加速した車が、バックミラーに警視庁本庁を映した。車窓から入る薰風が、玉川のところと毛並みを撫でつける。

塚内はドアで頬杖をつき、ファイルに挟まれている写真を眺めた。安っぽい白の壁紙に異形の血の花がこびりついている。壁に飛び散った血液は乾燥しており黒い彼岸花のようだ。ずるりと背を擦り付けるように落とした跡が太い茎で、床に広がる血だまりは異様に肥大化した球根に見える。

科学捜査によれば、前科のデータと照らし合わせて、血と左手の個人は断定された。死体を動かした跡も無く、殺害現場は部屋で間違いない。

また壁の血痕には胆汁が確認され、単純に血液を複製する個性で血痕を作つて出来る物ではない。実は生きている系の保険金詐欺という訳でもなさそうだ。

花弁のように上向きに散つた血からして、やや下から入射し、上向きに貫通した。人体を貫通するほどの力を発射したのだろうか？　だとしたら相当の個性制御に長けた犯人だ。弾体を男の背後の壁に当たる前に止めているという事になる。

床には唾液と血が混ざつた小さな血痕が残っていた。飛沫血痕を調査するに、男は直立している状態で殴られていた。

順番で言えば男はまず殴られ、鳩尾辺りに穴を開けられ、壁を背に座り込んだ後に左手だけを残して消された。

思案する塚内を、玉川がちらと盗み見る。警部であるにも関わらず、こうしてたびたび現場に出る。先日は取り調べも手伝つてもらつた。こうして間近で勉強させてもらえるのはありがたいが、玉川は多忙なはずの塚内が疲れている所を見た事が無い。常に昼行燈よろしくしているのが、部下としてはなぜだか恐怖を覚える時もある。いや、それは敬服だと内心でかぶりを振つて話かけた。

「なんなんですかね、犯人の個性。人体に穴を空けるだけなら増強型で説明がつきますけど、身体が消えたつてのが……血だまりを見るに遺体を物理的に動かした跡も無いです」

「極めて短時間での殺傷能力に優れた個性が使用されたことは、間違いないと思う」

塚内がそう考えた理由は、残された左手の断面だった。黒く炭化しているが、单なる

焼身とは少し違つた。部屋の主である女性が帰宅して男の手を発見した時、異臭はしなかつたそうだ。駆けつけた警官の報告からも人体が燃えた臭いは無いとの事。天井や壁にも煤は確認されなかつた。

「犯人は男の身体をじわじわと焼失させていない。断面は炭化しているからな。それと、左手には爛れや水ぶくれも無い。」

炭化とは、酸素が少ない状態で物質が高温かつ短時間で燃える時に見られる化学反応だ。つまり短い間に左手の切断面までを焼失させた。それも、ただの炎ではなく、男以外には一切干渉しない自然界のそれとは異なる不可思議な狐火。そういう個性なら説明がつく。切断面に酸素は、当然少ないのである。

個性犯罪の捜査に必要なのは想像力とそれを信じる力だと、塚内は考へてゐる。一見してどれほど突拍子の無い推理でも、警察はそれなしで何でも有りが個性の世の中を渡つてはいけない。

「狐火ですか、言い得て妙ですね。短時間で対象だけを焼けて、しかも部分的に残す事も出来る。燃えカスも無く、超自然的に焼く個性」

「その仮定を満足する場合、結構ヤバめだな。対象以外には干渉していないところを見るに、頑強さとかを無視して焼くかもしけん。応援を呼ぶにしても、耐久型のヒーローはダメだな」

ただ、塚内が気がかりなのはこの事件が単独犯なのか複数犯なのかという事だ。殴る、テレビを壊す、腹を空ける際に使われた個性と、狐火の個性。

土足で上がり込んだ足跡はあつたが、共犯者は靴をガムテープでぐるぐる巻きにしていたのかもしれない。あるいは、珍しいが一人に二つの個性が宿る事も無いわけではない。

「オールマイト以前、自称自警団時代の残党ですかね」

「自分から見た悪人は私刑にしてもいい、そうするしかないって連中は、今はステインだつけ？ の登場で軒並み鳴りを潜めたからなあ。なんというか、今回は妙な事件なんだよな」

「そなんですか？ 昔は結構こういう正義感を振りかざした個性犯罪があつたって聞きましたけど」

「残虐行為からして、犯人は感情論で犯行に及んだのは間違いないだろう。そうするとこで満足出来たんだ。でも昔の私刑はもつとわかりやすく残酷に遺体を残していた、世間に對して自分たちの正当性と正義感の強さを誇示するがごとくね。だからやはり問題は左手だ」

「なんていうか、一応の報いは受けさせたぞっていう、オマケ感なんだよな。自分の気持

ちのついでに、被害者と、一步踏み込んで遺族の気持ちを考えているような。それが偶然なのか、承認欲求なのか、死んだ女への手向けなのかがわからない。だが少なくとも、心の癒しや平穏、それを脅かす絶望や憎しみにこだわりがある。ただの残党の私刑じやない。もしそうならもつと凄惨に死体を作る」

「理屈では、自分の個性がバレるかもしないという危険性を冒してまで左手を残す必要は無いですもんね。それとも左手は焼けない制限の個性なのか、あるいは理屈ではない本能的な理由があつたのか……」

「そういう事だ。あと犯人はサイコかソシオの可能性が高いから、それっぽかつたら注视しろ。精神洞察つて今はもう警察学校でやってるよな？」

「……たまにするそういう論理の飛躍はビビるんですが」

「個性犯罪のデータベースの前例に狐火がないから初犯だろう、初犯でみんな殺しが出来るか？ しかも予測では人体を焼失させている。倫理観が破綻していく、だがこう殺さなければならないという、感情の癒しに対しての造詣的的理念がある。無茶苦茶だ……あ、ここだここ」

玉川が車を停めたのは、こぢんまりとした工務店だ。そういえば子供の頃からずっとあるなあ、といった感じの地域に根付いた店構えをしている。

「……に第一容疑者の情報が？」

「容疑者の個性届けの日付から小学校の同級生を当たつたら、けつこう面白そうなエピソードがあつた」

玉川は後部座席のバッグから取り出した書類に目をやりながら言つた。

「吉良吉影、ですか。個性はちょっととした物を動かす程度の念動力。ざつと身辺調査した感じでは特に不自然な点はありませんでした」

「ぼくも関与してないと思うよ。本命じやないけど、ただちよつと気になつたから。シロっぽいところから固めていく、が個性捜査の基本だしね」

「ごめんくださいと店に入ると、一人の従業員がデスクから顔をあげた。昔はヤンチャしてました、といつた風貌の男性。アポイントは取つてあるのでスムーズに話は進む。電話口では面倒ことはごめんだという口調だったが、吉良吉影の名前を出すと協力的になり、あつさりと聞き取りに応じた。

パートイションで区切られた応接室で塚内が早速ですがと切り出す。玉川はそのやり口を隣に座つて見学している。

「電話でお伝えした通りなのですが、当時の状況を詳しくお聞かせ願えますか」

「あの、これ、おれを捕まえるとかそういうんじゃないですね。吉良が、吉良くんがなんかの事件に関わってるから調べてるってのなら、協力は惜しみませんが」

「あなたへの告訴があつた訳でもないですし、暴行罪は時効ですよ。調査については詳

「しくは話せません」

「そう、ですか。わかりました、おれに出来る事ならなんでもします。でもずいぶんと昔の事なので正確にはちょっとと思い出せないんですけど」

従業員は首を撫でながら続ける。

「そのお、縮こまつて倒れてる吉良くんを見下ろしてたら急に体が持ち上がったというか」

「エレベーターに初めて乗った時のような？」

「いやそーゆー感じじゃなくて、ふわりというよりはギュっとした感じ？ ですかね」

なるほど、と塙内は意味深に沈黙する。従業員は緊張を紛らわす為か、お茶に手を着けた。

「体を持ち上げられた時は、肉体的な不快感がありましたか？」

従業員は首筋をぽりぽりと搔いて唸る。

「うーん、あつたような、なかつたような。正直、思い出せないです。思い出したくなつてのもあるんですが」

「それほど恐怖を覚える個性でしたか？」

「つていうより、吉良くんに個性を使われてビビつて逃げちゃつたのが、なんだか恥ずかしくて。無個性だつたはずの人間が急に、ねえ？」

「確かに吉良さんの個性届けの日付を見るに、平均よりかなり遅咲きですよね。ところで
でその日の夕食って覚えてます?」

「はい?」

不意を突かれた表情の従業員に、塙内は続けて言つた。

「いや、結構大事な事なんですよ。本気で思い出してください」

「ええ? うーん」

宙に視線をさまよわせて頸に手をやつて答える。

「いや、わからないです。でもこれ、ほんとに関係あるんですか?」

「ありますよ。話を戻しますが、吉良さんの個性で身体が浮いた時、痛みは感じました

?」

どうかなあ、と首をさする。

「ちょっと立つてもらつていいですか?」

え、はあ。と要領を得ない返事に、失礼しますよと断りを入れる。塙内は従業員の首
を軽々と片手で締め上げ、すぐに放した。

「こんな感じでした?」

従業員はえずいて答える。

「つびつくりしたなあ。ゲホッ……でも、あー近いかもしね。てか、なんだろう。

首、首かあ。これ……だつた気が、いやこれですよ！　思い出した、間違いない。手で掴まれる感覺！」

「そうですか、参考になりました。お忙しいところありがとうございました。では」
「あ、あのつ吉良が逮捕されたら教えてほしいんですけど、あの」

従業員の言葉を無視して、塚内と玉川は車に戻る。するとボンネットに座っていた黒い猫が飛び降り、とてとてと玉川に歩み寄つて、にやあと鳴いた。玉川が首の下をわざわざすると、満足そうに立ち去る。

「したわれてるねえ」

と塚内。どこか羨ましそう。

「助かりますが、ぼくは見張りなんていいって言つてるんですけどね。ヤバい組織犯罪を追つてるわけじゃないです」

用心に越したことはないさ。まあ、そうですが。と二人は車を出した。

「十中八九、吉良の個性は單なる念動力じやない。見えない手を動かしている。しかもあの従業員の発言が事実なら、吉良はうずくまつた状態で視覚外の人間の首を掴めた」「つまり、自分の感覺とは切り離された見えない手があるつて事ですよね？　なにが念動力だ」

個性として大別するなら、異形型と判断できる。自立行動する物も存在し、プロヒー

ローで例えるとワイルド・ワイルド・プツシーキヤツツに所属するピクシー・ボブの土流がそれにあたる。

「ぽつりと塚内がこぼす。

「吉良は異常かもしない」

「たしかに。今まで無個性だつたのが、ピンチで急に発現すれば友達に自慢したつておかしくない。それをちょっとした念動力で抑えていた

……ただ、本人にも見えない手とかの可能性もありますね。だから念動力と勘違いしているかもせんし」

「かもしだれない、まあそれはすぐにわかる事だ。重要なのは、透明な手を秘密にする必要性があつたのかどうかだ。別にバレたつて問題ないだろ？ 追及されると面倒な個性なのかもしだれない」

「ああ、悪事に向いている個性持ちつて偏見の目で見られるから、親から隠せと言われるやつですか。このまま追います？」 吉良

「いいや、取り急ぎ、透明な手を自覚しているのかを確認だけして反応を待つ。その間に別の容疑者を洗おう」

「つまり吉良は灰色ですか」

「客観的な事実から推察すると、そうだ」「主観では？」

玉川の問いに、塙内は薄く笑つただけで答えなかつた。

「それよりおやつにしよう。いい大福を出す店を見つけたんだ」